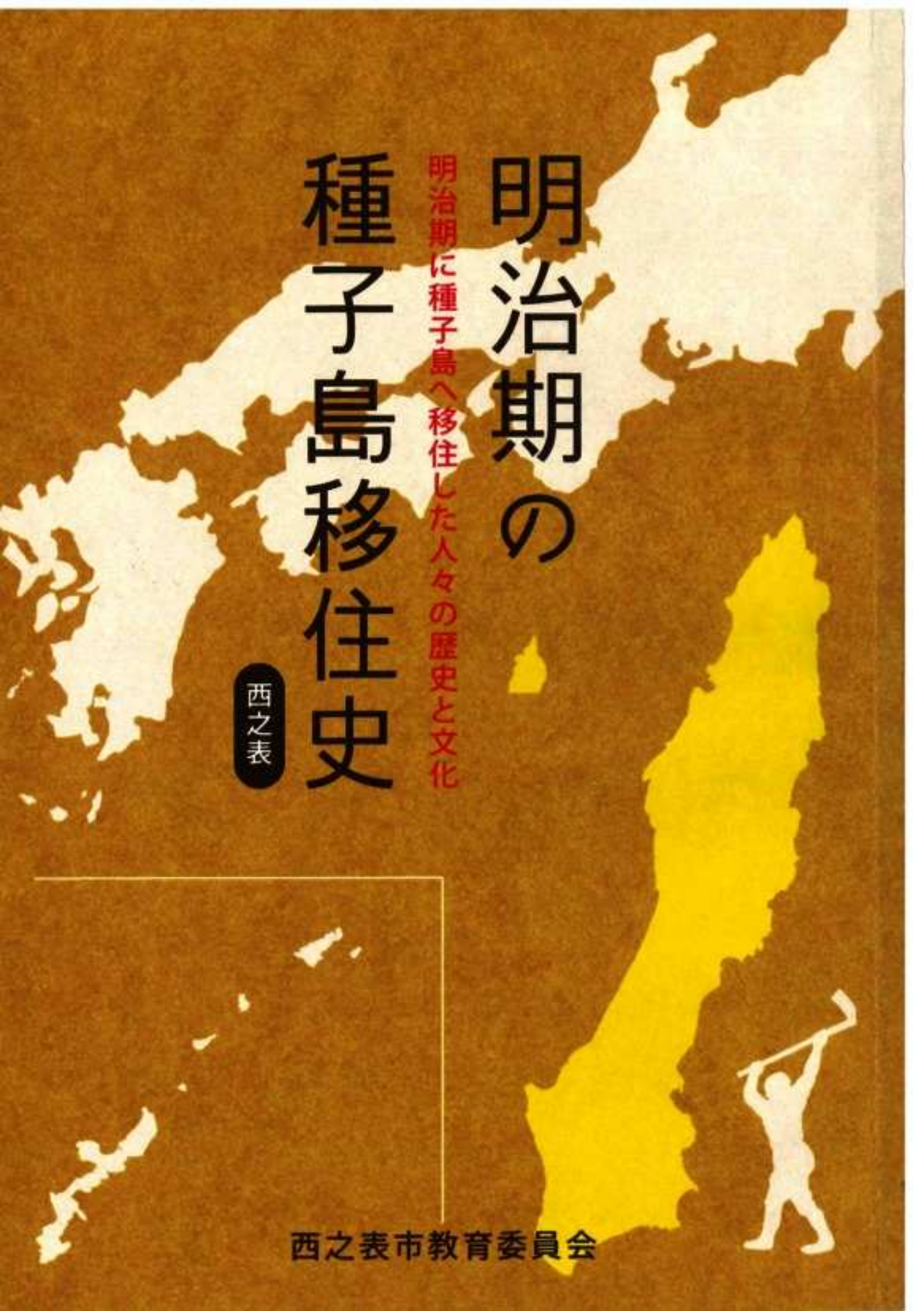
明治期の種子島移住史

明治期に種子島へ移住した人々の歴史と文化

西之表



西之表市教育委員会

明治期の種子島移住史

明治期に種子島へ移住した人々の歴史と文化

西之表市教育委員会

「明治期の種子島移住史」発刊にあたって

本年，明治維新から150年の節目を迎えた。明治期からの種子島を振り返ると，「移住」という歴史のキーワードが見えてくる。明治という大きな変革の時代に，全国から数多くの移住者が新天地を求めて種子島にやってきた。

明治17・18年には，相次ぐ大暴風雨が鹿児島県下を襲った。県下全域は稀に見る大被害を受け，中でも甑島は言語を絶する災害を被った。緊急の対策会議が開かれ，移住者の受け入れに適する地域調査が行われた結果，土地が広く，古くから漂着船の歴史があり，人情も厚く，移住者と親交しやすい種子島が移住地に選ばれた。こうして400戸以上もの甑島住民が種子島に入植した。

その他，理由はさまざまだが，静岡，関西，高知，大分，鹿児島，桜島，奄美大島，徳之島，沖永良部島，沖縄など全国各地からの移住も相次いだ。まさに種子島は移住天国となった。

移住の初代は，新天地に夢を馳せ，ヨキとナタで山林を開拓し，木炭を焚き，新集落を形成する。2代目は先代の財産の増殖に努め，移住地との融合を図る。3代目は移住地と一体化（土着化）し，大集落となる。現在，移住集落は4代～5代目を迎え，種子島の農林業の中心的な役割を担っている。しかし，国の経済成長に伴って都市部へ人口が流出し，島は過疎化の一途を辿っており，移住集落も例外ではない。

公民館の一隅の苔むした石碑が艱難辛苦の移住の歴史を語る。本誌をきっかけとして，広く種子島の移住の歴史を知っていただき，独特な種子島の有り様に興味をもっていただけたら幸いである。また，本誌が，移住当時の開拓者精神を思い起こす契機となり，集落の力強い発展と希望ある西之表市建設の一助となることを願う次第である。

末筆ながら本誌の製作・発刊にご協力いただいた皆さんに心から感謝申し上げます。

平成30年12月

西之表市教育委員会

明治期の種子島移住史

明治期に種子島へ移住した人々の歴史と文化

1 移住の島・種子島 3
■移住の島・種子島
移住分布MAP 3
2 移住の記録 6
■飢饉からの脱出―甑島―
移住に至る経緯 6
移住計画の決行 7
入植当時の様子 9
地元民との関係 10
天然痘の流行 12
甑島移住民の信仰 14
移住の恩人 牧野篤好 15
移住民が伝えた「トシドン」
■新天地を求めて―奄美群島― 16
沖永良部島の移住
移住に至る経緯 16
入植当時の様子 17
再び、安住の地を求めて 17
久留真敷神社 19
徳之島の移住
移住に至る経緯 19
入植当時の様子 19
落胆からの再起 20
その他の移住
徳之島移住の指導者 石井清吉 20
■種子島に新風を巻き起こす―静岡県― 21
移住に至る経緯 22
入植当時の様子 22
事業の成功 24
■20世紀最大の火山災害―桜島―
移住に至る経緯 26
移住計画の実施 27
入植当時の様子 27
鴻峰小学校 28
月讃神社 29
3 移住者と紡ぐ、種子島の歴史
地域おこし協力隊 33
サーファーの移住 34
伊関の農泊プロジェクト 35
希望の島・種子島 36
4 移住記念碑
記念碑 38〜59
記念碑地図 60・61
西之表市移住年表 62〜65

1 移住の島・種子島

移住の島・種子島

種子島というと、どんなイメージをお持ちですか。「鉄砲伝来」「サーフィン」「ロケット」「安納芋」…。いろいろあると思いますが、種子島について「移住」というイメージを思い浮かべる方は、ほとんどいないのではないでしょうか。

しかし、種子島の歴史を語る上で、「移住」は欠かすことのできないキーワードです。特に、明治期以降の「移住」は、現在の地域社会の構成に直接関わる重要な出来事でした。

かつて、自分の生まれ育った故郷を離れ、さまざまな思いを胸に種子島にやってきた人々が少なからずいたこと。そして、その人たちが流した汗と涙の上に、今の種子島があること。その歴史を振り返り、先人たちの足跡を辿れば、今まで気付かなかった種子島の魅力が見えてきます。

2 移住の記録

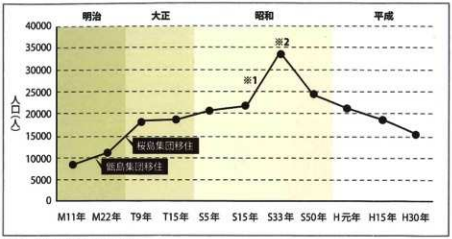


図1　西之表市の人口変化

※1　戦後の復員・引き揚げ等による人口増加

※2　市制施行した昭和33年、33,623人まで人口増加

明治から大正、そして戦後にかけて、種子島には全国各地から移住者がやってきました。

移住してきた時期や経緯はさまざまですが、現在西之表市に存在する集落の約三分の一は、移住集落です。西之表市の既存集落は交通の便のよい海沿いや耕作に適した平地に多く形成されているのに対し、移住集落は種子島の中央部を南北に走る台地上に多く点在しており、未開の原生林を開拓して形成されたことがわかります。

一方、中種子町・南種子町では、西之表市に比べて平地が多いので、移住地も既存集落の近隣に設けられています。

市政が施行された昭和33年に、西之表市の人口は3万3623人でピークを迎え、その後減少していきますが、3万人を超える人口を達成した背景には、明治期以降の移住者とその子孫たちの存在がありました（図1）。

では、実際にいくつかの移住の事例を見てみましょう。

飢餓からの脱出 ―甑島―

移住に至る経緯

甑島は、薩摩半島の西方約30㎞の東シナ海上に浮かぶ島で、北東から南西に連なる上甑島・中甑島・下甑島の三島からなる島です。全長約38㎞、面積約120㎢で、平地が少なく起伏の激しい地形、土地は痩せて数年に一度しか耕作できない切替畑が多いという状況で、当時の住民は半農半漁の生活を送っていました。

このような生活であったところに明治16年には虫害、17、18年には連続して猛烈な台風に襲われ甑島は大飢饉となり、ついに住民は、地元からの移住を願い出ることになりました。

当時の鹿児島県令(今の県知事)渡辺千秋は、明治19年から三年かけて甑島住民約600戸を種子島に移住させる計画を立てるとともに、農商務大臣西郷征道に5万円を下付するよう願い出ました。そして、最終的には国が2万5千円、県が2万5千円を負担することで、種子島移住計画が実行されることとなったのです。

移住計画の決行

明治19年、西之表村に甑島人民移住事務所(初代所長 丹生希生)、中種子の野間村と南種子の茎永村には出張所が設置され、移住に関する業務を担いました。

移住船出航の際、下甑島手打港は送る者と送られる者でごった返し、二度と会うことはできないかもしれないという悲壮な別れをしたといいます。中には直前に移住を取りやめる人もいたそうです。

住民が乗り込んだのは、幅約3m、長さ約10mのいわゆる「団平(だんべえ)船」(写真1)で、風のある時は帆で走り、風のない時は5本の櫓で漕ぐ船でした。航海中はシケに遭い、ほとんどの者が船酔いしながら、山川港経由で3日をかけて西之表の赤尾木港に到着しました。

赤尾木港には移住民を受け入れる村の世話人が迎えにきていました。しかし、到着した人々は船酔いと空腹ですぐには動けず、その日は西之表で一泊し、翌日になってから各入植地へと出発しました。移住民の所持品は少なく、汚れた衣服を傍に身にまとっただけの人もいたといいます。甑島での苦しい飢餓状態をなんとか脱却しようと、この種子島移住に掛けた人々の切羽詰まった状況が想像できます。

このようにして、甑島住民の移住は国・県主導のもと、明治19・20年と実施されました。当初は三か年の計画でしたが、甑島の食糧事情が改善してきたことなどにより、三年目は実施されなかったようです。二年にわたる移住事業の結果、種子島各地に428戸の甑島住民が入植していきました(表1)。

入植当時の様子

入植から二年間、生活が安定するまでは、国からの補助が支給されました。食料は、大人一日玄米5合、老人・子供が2合5勺、食塩は、大人一日2勺、老人・子供

写真1 団平(だんべえ)船
出典 『なつかしき常滑』常滑郷土文化会つちのこ

写真2 移住時に甑島から持参した甕

表1　甑島移住民の村別移住状況（単位：戸）　西之表市　中種子町　南種子町
参考　『甑島より種子島へ 野木之平百年』P.106（1986年発行）

村　名	明治19年	明治20年	合計	現在の地域
西之表村	15	16	31	石筵・今年川・鞍勇
国上村	13	12	25	野木平
伊関村	16	7	23	柳　原
安納村	3	2	5	軍場
現和村	22	8	30	川氏
安城村	26	24	50	平山・平園・大野
古田村	25	0	25	上之町
住吉村	11	1	12	形之山
牧川村	4	0	4	
納官村	15	3	18	
増田村	24	15	39	
野間村	24	14	38	
油久村	9	5	14	
田島村	14	5	19	
坂井村	17	6	23	
中之村上方限	25	0	25	殷の口・長木田・大川
中之村下方限	11	0	11	真所・里・山神・郡原・夏田
西之村	16	0	16	崎原・上瀬戸・立石
島間村	20	0	20	浪久保・田尾・牛野
総　計	310	118	428	移住事務所閉鎖（明治22年）までの戸数は435戸

※イメージ図　入植当時の十間長屋と呼ばれた住居

が1勺支給されました。その他に、各家庭に手桶1つ、小桶1つ、柄杓1本、鍋1つ、釜1つ、鍬2本、山鍬2本、鉈1本、鎌1本、斧1本、肥料丹荷1荷、肥溜桶1つ、砥石1つと種芋3石5斗が支給されました。

当時の住居は、一世帯につき桁2間半梁2間で床を3坪、土間を2坪とし、屋根は茅葺き、壁も茅でした。住宅は、十間長屋と呼ばれるものでしたが、上之町（古田）の十間長屋が火災で全焼したことから、戸建てに変わりました。

土地は、1町余り支給されましたが、さらに自ら開墾した分の土地も与えられました。しかし、一年目の移住民たちは、飢餓状態で移り住んでおり、体力的にすぐに開墾作業には取り掛かれず、カライモ（サツマイモ）の植え付け時期も遅れてしまったことから、十分な収穫は得られなかったと記録に残っています。

地元民との関係

移住事業における最大のポイントは、元々その土地に住んでいた地元民とうまくやっていけるかどうかです。明治19・20年の甑島住民の移住先を選定するにあたり、「鹿児島県公報」では種子島のことを次のように評しています。

『世上移民の挙あるに当たってはその当局、郡村にありては、たとい余地あるも種々苦情を以てこれを拒絶せんとするは一般小民の通弊たり。しかるに本島は、民心穏順朴実にして右等の陋習なく、有志の輩に於いては、人煙稀疎なる

写真3　カシミア号漂着記念碑（立山漁港）

より物産興らず、天与の富を失うを憂え、しきりに殖民を望むもの多し。』

（世の中移住を行う際には、たとえその場所に（受け入れる）余裕があっても、あれこれ苦情を言って拒絶しようとするのが一般庶民によくある弊害である。しかしこの島は、人民の心が穏やかで実直で、そのような悪い慣習はなく、志のある者たちにいたっては、産業振興のために是非人をよこしてほしいという）

折しも明治18年9月に、アメリカの商船カシミヤ号が種子島東海岸沖で難破し、立山と涙脇（伊関）に乗組員が漂着した際にも、島民が手厚く看護を施しました。この出来事は、見知らぬ者にも手を差し伸べる島民の人情の厚さと寛容さを象徴しています。

甑島の移住事業の際も、種子島の地元民は、甑島の惨状に心から同情し、種苗や食糧を持ち寄って与えたり、農具や生活用品を貸したり、田畑や牛馬を貸したりするなど、移住民の生活に便宜を図ったといいます。

移住民を受け入れた集落では、地元の責任者を決めて移住民数戸を割り当て、その世話をしました。これが「親分―子分」制度です。親分の家業が忙しい時には、子分の家の者たちが手伝いに行き、米や甘藷（サツマイモ）を賃金代わりにもらってくるなど、どちらにとっても良い、理にかなった制度であったようです。このように、地元民との交流がうまくいった地域ほど、移住は成功したということです。

天然痘の流行

移住事業一年目の明治19年、最初に坂井村（中種子）において甑島移住民の中に天然痘が発生したという記録が残っています。天然痘は非常に感染力が強く、致死率の高い病気で、非常に恐れられていました。最初の患者は幸い死に至らなかったようですが、村民10人以上に伝染し、死者も出たということです。

また、この数か月後には御牧（立山）の移住民の中にも天然痘が発生したと、移住事務所に急報が入りました。所員・牧野篤好（後の第二代所長）を派遣して調べたところ、すでに死者3人、患者20人に及んでいました。住居が長屋造りであったために、最初の患者の発生から急速に感染が拡大し、近隣の村民へも伝染していました。そこで隔離小屋を設けて、移住民のうち健康な者をそちらに移し、近隣の30～40世帯は原野へと避難しました。

移住事務所は、近隣の村々で看護人を募集しましたが、病気を恐れて誰も応募しなかったため、さらに待遇を良くして西之表村まで範囲を広げて募集しましたが、やはりほとんど応募はありませんでした。そこで、牧野所員自ら患者に薬を与えたり、埋葬を手伝ったりしていましたが、ついに牧野所員も天然痘に感染してしまいます。幸い、二週間余りで牧野所員も回復、最初の急報が入ってから約一か月で、感染は終息を迎えました。最終的な死者は16人にのぼりました。

同じ頃には、中之村（中種子）や西之村（南種子）の移住民の間でも天然痘が発生し6人の死者が出ています。

明治19年の移住後、第二回目の移住が行われる翌年3月までの死

写真4　天然痘で亡くなった方を埋葬した疱瘡墓跡（御牧 / 立山）

者は、合計49人（移住民１３８０人中）で、そのうち天然痘による死者は22人であったと記録されています。

天然痘発生後、坂井村（中種子）では移住民の受け入れを一時恐れる風潮もありました。しかし、当初移住民をひとまとめにして入植させる案もあった中、分散して入植させる案を採用したおかげで、天然痘の流行が小集団の中に限られ、被害を最小限に抑えられたと当時の記録には記されています。

甑島移住民の信仰

江戸時代、薩摩藩は一向宗（浄土真宗）を厳しく弾圧しました。しかし甑島の住民は、仏像や経文を隠しながら隠れ念仏を続けるなど、非常に強い信仰心を持ち続けてきました。一方種子島は、11代島主種子島時氏が種子島・屋久島・口永良部島の三島を律宗から法華宗に改宗して以来、全島法華宗の島でした。

命からがら種子島に移住してきた甑島の人々は、種子島に浄土真宗の寺院がないことを、移住直後から嘆いていたようです。甑島出発の際に、御影（写真5 阿弥陀如来像を描いたもの）や御名号（南無阿弥陀仏と書いたもの）を何より

写真5　御影（上之町 / 古田）

写真6　信楽寺（野木平 / 国上）　傍らに移住記念碑が建てられています。

写真7　甑島移住記念碑（信楽寺）

も大切に持ってきた人もいました。

移住後、数名の代表が真宗大谷派鹿児島別院に歎願し、明治22年には僧侶が派遣されて移住部落をつぎつぎと慰問しています。その後、常任の僧侶が赴任、明治34年には西之表説教場も開設されました。

また、それとは別に、住民が日常的に仏様を拝む場として、移住直後から各集落に「小寺」が開設されました。甑島から大切に携えてきた仏像をご本尊としている小寺もありました。当初は各家で「小寺」の機能を持ち回り、担当になった個人宅に集まって仏教行事を行っていたようですが、時代とともに公民館などに小寺を設けるなどして、信仰が続けられました。

野木平では、小寺制度が寺院（信楽寺）建立に発展しました（写真6）。仏教行事が集落の年中行事の中に組み込まれ、浄土真宗の信仰は、集落民の生活と密接に関わりながら今に受け継がれています。

甑島から移住してきた人たちにとって、浄土真宗の信仰は大きな心の拠り所であり、それによって結びつきを強めながら、過酷な開拓生活を乗り越えていった様子をうかがい知ることができます。

写真8　手打浜の石
移住記念碑には下甑島手打浜の石が添えられています。

移住民が伝えた「トシドン」

トシドンの様子（鞍勇）

移住者が故郷から種子島に運んできた文化はさまざまありますが、甑島から伝わった「トシドン」もその一つです。

トシドンは、秋田のナマハゲに似た年神（来訪神）で、毎年、大晦日の夜になると山の上に降り立ち、首切れ馬に乗って鈴を鳴らしながら家々を回り、その年に悪さをした子どもを懲らしめた後に年餅を与えて去っていくと言われています。甑島では、地元の大人たちが鼻の長い鬼のような面やシュロやソテツで作った蓑のような衣装でトシドンに扮し、子どものいる家々を回る年越しの年中行事として受け継がれてきました。

トシドンの様子（野木平）

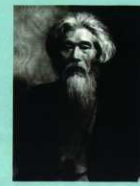
甑島からの移住民によって、甑島のトシドンと同様の年中行事として、野木平、鞍勇、柳原などにトシドンが伝わりました。

トシドンは、鐘を打ち鳴らしたり、ほうきで壁などを叩いたりする脅し役を伴って家に入り、大きな声を上げながら子どもの名前を呼び、目の前に座らせてお説教をします。「親の言うことは聞いとるか！」「勉強もしといか！」などと怒鳴られて、その恐ろしさに顔をこわばらせたり、泣き出したりする子どももいます。しかし、「歌を歌え」などと得意なことをさせたり、よいところを褒めてくれるトシドンもいます。お説教が終わると「言うことを聞きます。』と約束をさせ、大きな餅を与えて「来ぱもくいからなあ、よっかあ！ちゃんと天から見といちゃろ～！」などと言いながら去っていきます。

トシドン役の若者や子どもの減少によって途絶えた時期もありましたが、現在は野木平と鞍勇で復活し、貴重な文化として継承されています。

発祥地の「甑島のトシドン」は、UNESCOの無形文化遺産にも登録されました。

移住の恩人　牧野篤好



牧野篤好は、静岡県城東郡棚草村生まれで、明治16年に官命を帯びて来島して以来二十年間にわたり種子島のために尽くした人です。

明治19年、20年の甑島からの大規模移住の際には、世話係主任として移住民のために奔走しました。甑島からの移住民の間で天然痘が流行した時には、自ら看護・埋葬にあたり、自身も罹患してしまいました。

明治30年には初代熊毛郡長となって島の勧業奨学に努め島民から慕われました。

明治35年に退官して静岡に帰ると、種子島が茶業に適するとして移住を勧めました。それにより静岡県から番屋峯に入植した人たちが茶園を造成し、以後、一般農家にも茶の栽培が普及し、種子島は県下における茶業の先進地となりました。

また、牧野のつてを頼って静岡から太田（国上）に移住してきた覓家は、工夫を凝らして生活を豊かにし、林業をはじめとするさまざまな事業を興して地域の発展にも寄与しています。

牧野篤好は、関わる人々に寄り添い、橋渡し役も務めた、まさに移住の恩人ともいうべき人ではないでしょうか。

新天地を求めて ―奄美群島―

江戸時代、薩摩藩の厳しい統制下でサトウキビ栽培を強いられてきた奄美群島の人々は、明治に入ってからも苦しい生活を送っていました。藩政時代には貨幣の流通が無かったため、農民たちは借金の利息がどんなものか知らないままに悪徳商人に借金を重ねました。せっかくできた砂糖は安く買い叩かれたり、価格が暴落したりして、どんなに働いても生活は楽にはなりませんでした。また、度重なる台風の襲来やそれに伴う塩害、さらには病害虫の発生で、慢性的に食糧不足が続いていました。

沖永良部島の移住 ――

移住に至る経緯

明治28年（1895年）頃、沖永良部島では、困窮した状況の中、赤痢が大流行し、その際、北種子村（現・西之表市）出身の宇辰岩女という女性も赤痢にかかり、亡くなってしまいました。岩女が生前、「種子島は土地も肥えていて食べるものに困ることはなく、人情も厚くてとても住み良い所だ」と語っているのを聞いていた和泊村国頭の轟木喜之助・兼夫婦は、岩女の遺骨を胸に、一家で種子島へと移り住みました（まずは兼が単身移住したという説や数家族で移住したという説もあります）。

入植当時の様子

移住当初、轟木一家は、上古田（国上）に茅葺きの掘立小屋を建て、借地で食糧になる作物をわずかに育て、塩炊きや漁、日雇いの仕事をして、その日暮らしの苦しい生活を送りました。自分たちの土地もなく、なかなか生活が安定しませんでしたが、それでも沖永良部島から轟木一家を頼って移住してくる者もあり、大正2年（1913年）までに40戸ほどが上古田に入植したようです。

甑島の場合とは違い、公的な支援もなかったので、当時の移住者たちの苦労は想像を絶するものであったに違いありません。

再び、安住の地を求めて

上古田で同郷の者同士、肩を寄せ合ってなんとか生活を送っていましたが、大正13年（1924年）、そこが私有地と判明し、立ち退きを命じられます。

立ち退きを命じられた40戸の内、15戸は桜園の土地を購入して移り住むことになりました。当時桜園では、大正3年の桜島大噴火の際に避難してきた桜島島民たちの帰還が相次いだため、その後の土地を購入することができたのです。

残る25戸は、官有地であった白石の土地の払い下げを受け、昭和2年（1927年）、ようやく白石に安住の地を得ることができました。

沖永良部島からの移住民は、最終的には二つの地区に分かれることにはなりましたが、桜園・白石それぞれに移り住んでからは開拓も進み、カライモを中心とした農業で生活を安定させることができました。

久留真嶽神社

沖永良部島からの移住民は、桜園と白石に分かれて暮らすことになりましたが、それぞれ『久留真嶽神社』（写真1・2）という同じ名前の神社を建立して信仰しています。

写真1　久留真嶽神社（桜園）

写真2　久留真嶽神社鳥居（白石）

この神社は、移住元の沖永良部島の和泊町国頭にある「岬神社」の分社として建てられました。岬神社のご神体は、不思議な伝説のある「光る石」で、種子島の久留真嶽神社のご神体は岬神社の光る石が発見された辺り（クルマ沖と呼ばれる海中）の石を持ってきたものだと言われています（写真3・4）。

白石の久留真嶽神社の鳥居には、沖永良部の言葉で「感謝の志」が記されています（写真5）。

種子島に安住の地を求めながらも、故郷の誇りを忘れずにいたいという、移住民の思いが偲ばれる神社です。

写真4　ご神体（白石）

写真3　ご神体（桜園）

感謝の志
ウヤホー　ミヘデロー
ナタター　ウヤホーヌ　努力ヌ
ウカギ　ナマヌ　ワチャガ
アヤビンドー　ミヘデロー　拝
カサネガサネ　ミヘデロー　拝

訳

先祖の皆様　ありがとう
あなた方　御先祖様の努力の
おかげで　今の私たちが
あります
重ね重ね　ありがとう

写真5　感謝の志

徳之島の移住

移住に至る経緯

明治6年の地租改正条例をきっかけに、種子島の旧士族たちがそれまで所有していた広大な土地を手放し、島外の資産家たちがその土地を購入していきました。

佐賀県の財閥・深川助九郎は、購入した野木（立山）の広大な土地を使って当時好調だった製糖業を興そうと計画しましたが、島内の人を従事させるにしても、野木はあまりにも不便でした。そこで、徳之島の知人・石井清吉に、食糧難に喘ぐ島民を率いて種子島に移住しないかと持ちかけました。明治28年、石井は種子島を訪れて開墾場所の調査を行い、明治30年に徳之島の十数戸の家族を伴って、野木に入植しました。

入植当時の様子

石井らは、移住後約半月、芦野（立山）の農家の倉庫などを借り、入植地に住居ができるまで滞在しました。入植地の野木では、大人三人でやっと手が届くほどの太さの大木を斧で切り倒し、周囲から火を付けて焼き、その後に蕎麦や菜種を植えたということです。住居は茅葺きの掘立柱で、幅3間、長さ4間の12坪ほどの広さ、土間には粘土でかまどを作りました。また、居間には囲炉裏を作り、床は二ガ竹を編んだ上に簡素な畳を敷きました。

落胆からの再起

徳之島からの移住民は、移住を勧めた深川助九郎から「二年働けば、開拓した土地がもらえる」という条件を聞いていましたが、入植後しばらくして、その約束は虚偽のものであり、単に労働者として雇われていることを知りました。その後、製糖業が思うように振るわず衰退しはじめ、先行きの不安から二十番（中種子）へ再移住する家族もあったといいます。しかし、野木に残った人たちの中には、少ない報酬を蓄え、十数年かかってついに深川が手放した土地を自分のものにした人もいたそうです。

野木では、石井清吉が、養鶏、養蚕、キノコ栽培などを手掛けて自ら農業経営の模範を示し、移住民はその指導を受けながら、集落の基盤を作っていきました。

その他の移住

奄美群島からは、沖永良部島、徳之島の他にも、奄美大島や与論島、喜界島などから、相当数の移住がありました。西之表では十三番、十五番、野木、万波など、中種子では二十番（増田）、横町（野間）、西之山（油久）、長谷（坂井）など、南種子では小平山（島間）、上瀬戸（西之）、焼野（上中）などに移住したという記録があります。中種子では百数十戸もの移住があったようですが、いずれも詳細な記録は確認できていません。

与論島からの移住民の子孫たちは、故郷与論島の美しい砂浜にちなんで「百合ヶ浜会」という会を作り、同郷者の絆を深め続けています。

徳之島移住の指導者　石井 清吉

石井清吉

石井清吉は、安政3年（1856年）三重県濃会郡小俣村で生まれました。青年時代は向学心に燃えて上京し慶応義塾に入学、福沢諭吉の下で法学・経済学を学びました。その後、東京日日新聞の記者を経て、沖縄で米穀会社を経営。その後、徳之島へ移住して島の女性を妻に迎え、私塾を開いて島のリーダーを育成しました。

当時、奄美諸島の農民たちの非常に苦しい状況を見かねた奄美大島の島司・新納中三は、石井の評判を聞いて徳之島から招き、この難関打開を委託しました。石井は、暴利をむさぼる商人を訴えて裁判で勝利し、島の救世主と尊敬されました。また、島の農民に『三法方』という心構えを説いて意識改革を行いました。

明治30年、種子島に入植した石井は、ここでも地域の生活向上のために尽力しました。

立山小学校を廃止し安城小学校に合併する案が村議会に出された際には、石井が合併の条件として「通学路上にある三つの川にコンクリート製の頑丈な橋を架けること」を理路整然と要求したところ、合併案が白紙に戻され、立山校区民は安堵しました。

このような出来事を経て、石井は種子島でも一目置かれる存在となりました。大正13年（1924年）、西之表市榕城中目において69歳でその生涯を閉じました。

※「三法方」とは、負債をしないように努力し借入れ依存を解消すること、勤勉に働くこと、節約・倹約に努めることを説いたもので、農民はこの三法方を忠実に守って生活の向上に努めたといいます。

種子島に新風を巻き起こす ―静岡県―

移住に至る経緯

明治35年、初代熊毛郡長牧野篤好は、退職後に郷里静岡県に戻ると、茶業経営者に「種子島は寒暖差が大きく、茶の栽培に向いている」と移住を勧めました。その勧めを受けて明治42年、松下助七、栗田茂三郎、松下清作の三氏が静岡より番屋峯（古田）に入植し、原野を切り開いて茶業を興しました。

これに遅れること二年、明治44年に静岡県掛川市出身の筧久平（写真1）は、林業経営を志して太田（国上）に一家で入植しました。筧家も、牧野篤好のつてを頼って移住し、同郷の松下ら先発移住者にもお世話になったと記録されています。

写真1　筧久平と妻ナヲの肖像画

入植当時の様子

松下らが入植した番屋峯は、サルやイノシシ、シカが棲む原生林であったと記されています。松下らは、直ちに茶業を軌道に乗せるため、山林の開墾・茶樹の栽培・製茶技術の改良などに心血を注ぎました。それまでの野生の茶樹を利用した自然に任せた製茶法を改め、茶業を生業として確立するために日夜努力したそうです。あくまでも茶業が専門で、茶以外には、自家消費用にわずかにカライモ・米・麦を作る程度でした。入植から半年間は風呂もなく、谷川で水浴びをして過ごすような不自由な生活でした。

一方、筧家が入植した太田は、湊（国上）の湊川最上流域にあり、西之表から遠い不便なところであったので、基本的には自給自足の厳しい開拓生活でした。条件の良い所は畑にし、アワ・キビなどの雑穀や野菜の栽培を行いました。

また現金収入確保のため、シイタケ栽培も行いました。シイタケは乾燥させて干しシイタケにし、船の汽笛が聞こえると、馬に乗って西之表まで売りに出かけたそうです。

写真2　大正14年当時の筧家

写真3　シイタケ干しに使っていたエビラ
（資料提供　筧　伸平氏）

写真4　現在の番屋峯茶畑

事業の成功

番屋峯では、明治43年には茶の植栽面積が1・5㌶になり、明治44年には走り新茶第1号の出荷販売を行いました。その後、番屋峯の茶業が軌道に乗るにつれ、静岡県からの移住も増加し、地元民にも茶業の経済的な効果が認識されていきました。入植当時は原生林であった地域が、美しい茶畑のうねる光景となり、昭和25年に建てられた「茶業記念之碑」（写真5）には「番屋峯一帯の茶業が本県茶業の支柱として茶業振興に礎（いしずえ）した功績は大きいと言わねばならない。」と記され、番屋峯の茶業が県下においても高く評価されたことがわかります。

写真5　茶業記念之碑

写真6　ヘゴの自生群落（太田／国上）　ヘゴ…大型の木生シダ植物

筧家では、懸命な努力の末に太田集落周辺の広大な山地を手に入れ、建築用材としてジスギ・ヒノキ・クロマツ・アカマツ・ヤクタネゴヨウなどを植林し、数十年のサイクルで伐採し、計画的に林業経営を行いました。また、木炭の製造も行い、大阪堺の商人と高値で取引していたそうです。筧家のこうした各種事業の中で、地元住民の雇用も生まれ、生活の向上と地域社会の発展に貢献しました。

また、筧家所有の山林にあるヘゴの自生群落（写真6）を地元の観光資源として保護し、その中に遊歩道を整備しました。このようなところからも、移住者として地域に恩返しをしたいという筧家の代々受け継がれた思いが伝わってきます。島内でもこれほど見事なヘゴの自生群落は他になく、平成22年に西之表市の天然記念物に指定されています。

写真7　筧家集合写真

20世紀最大の火山災害 ―桜島―

移住に至る経緯

鹿児島の錦江湾にそびえる雄大な桜島。その桜島が大正3年1月12日、54年ぶりに大噴火しました（写真1）。当時の種子島側の郡役所記録では、次のように様子が記されています。

「1月12日午前10時頃より、北西に当り遠雷のとどろく如き音響を聞きて驚く。見れば異様の黒煙さかんに天に沖し。（中略）午後6時頃時計の鍾を止むる程度の震動を感ず。鳴動は終夜持続し、同方面に火光の或は電光の震間を走り、或は爆発の天を焦がすが如き凄惨なる状を認めたり。」

文中の「午後6時頃」の「震動」とは、桜島の大噴火後に発生した、桜島南西沖を震源とするM7・1の大地震と思われます。

写真1　桜島大噴火
山口鎌次氏 撮影

数日後、鹿児島県知事より郡長に電報が届き、種子島にも桜島大噴火の第一報がもたらされました。噴火5日後の1月17日の電報では、

「桜島罹災民移住に関し協議の件あり、貴官及び三種子村長（北種子村・中種子村・南種子村）至急出頭ありたし」

とあり、すでに桜島罹災民の種子島移住計画が持ち上がっていることが分かります。

鹿児島などへ避難した桜島住民は、寺や小学校で過ごした後、県の斡旋で種子島や肝属、宮崎県の小林などへの移住を決めました。

表1　桜島移住集落内訳　　参考『西之表市百年史』（1971年）

村名	戸数（戸）	人数（人）	集落名
国上村	86	529	桜園
西之表村	30	207	桃園
西之表村	13	68	竹麓
古田村	25	164	平松
古田村	5	27	雷麓（火桔木）
古田村	21	124	二本松（屋久川）
安城村（現・中割）	130	863	十六番・生姜山等
安城村（現・立山）	26	211	野木（野木小野）
計	336	2,193	

移住計画の実施

桜島の罹災民たちは、3月13日以降10回にわたって種子島へ移住してきました。336戸、2193人が移住してきましたが、当初はほとんどの移住民が現在の西之表市に入植し、中種子町・南種子町に入植した人たちはいなかったようです。入植した地域の内訳は、上記（表1）のとおりでした。

入植当時の様子

移住にあたっては、国が国有林を県に無償で払下げ、県はこれを罹災者に貸与し、開墾が完了して一定の年数が経過したら、無償で譲渡する仕組みでした。移住民には、移住費・農機具・種苗費・小屋掛け費・家具費・食糧費などが支給されましたが、入植した土地は未開の国有林だったので、開墾は困難を極めました。

住居は茅葺き・藁葺きの掘立長屋を作り、一棟に数戸の人々が生活するという状況でした。冬は隙間風が入ってきて寒かったという証言も残っています。

また、入植当初は食べる物もなく、険しい山道を歩いて近隣の集落までカライモを買いにいったそうです。男は山芋を掘ったり炭焼きをして、女はそれを売り歩きながらなんとか生活し、人力で大木の生い茂る原生林を開墾していきました。

このような困難な状況でしたが、平松（古田）に入植した人の証言では、地元の人たちとの関係

は良好で、平山（安城）や牧川（中種子）の人たちまでもが芋のツルなどを持ってきてくれたということです。このように、地元民は桜島からの移住民を温かく迎え、励ましてくれたという証言が数多く残っています。

写真2　鴻峰小学校と児童（昭和25年）

十六番（中割）では、長屋の他にも宿屋や飲み屋なども立ち並び、一時はずいぶんと栄えたそうですが、徐々に島内の別の地域や鹿児島市に移っていきました。

鴻峰小学校

中割地区に移住した世帯の中には、小学校に通う年代の子どもを持つ世帯が多く含まれていました。しかし、移住後すぐに学校を新設することは難しかったため、大正3年3月、古田・立山・星原の三校に依頼して、児童の教育を行うことになりました。

その後、同年11月には、県・郡・町の補助により、中割に2学級の「鴻峰小学校」が新設されました（写真2）。鴻峰小学校の校歌には「黒潮しぶく南の　種子島ねの頂に大正三年の噴煙で　礎なり学び舎は希望の光映える憩　我らの誇り鴻峰校」（作詞竹内尚孝）と歌われています。

鴻峰小学校は、昭和30年代には200名を超える児童が在籍していましたが、その後校区の過疎化が進み、児童数が減少。平成12年3月に最後の卒業生を送り出して休校となり、平成27年3月に廃校となりました。

写真3　鴻峰小学校 校歌が刻まれた石碑
（旧鴻峰小学校・現こうのみね館敷地内）

写真4　月讀神社

月讀神社

突然の桜島の噴火により、住み慣れた土地を離れなければならず、辛い開拓生活を送ることになった桜島の移住民にとって心の拠り所の一つとなったのは、やはり信仰でした。

中割地区には、桜島の横山に祀られている月讀神社の分社があります。当時の桜島の月讀神社は、噴火により溶岩の下に埋没してしまいましたが（昭和15年に場所を移して再建）、移住民たちは分社を建て信仰を続けました。武運・子宝・子どもの健やかな成長にご利益のある神様として親しまれ、事あるごとに皆で集い、故郷を偲んだといいます。

写真5　移住百年記念植樹碑（月讀神社境内）

移住百年記念植樹碑
かたりつぐ
桜島より
島に移りし
百年過

3 移住者と紡ぐ種子島の歴史

移住者と紡ぐ種子島の歴史

写真1　西之表市街地

ここまで見てきたように、全国各地から種子島に移住してきた人々は、筆舌に尽くしがたい苦労を乗り越えて原野を切り開き、生活の糧を得るべく努力と工夫を重ねました。その気概と向上心により、多くの移住者が、一族の繁栄のみならず種子島の発展にも貢献してきました。

また、忘れてならないのは、同じ事情を抱えまとまった戸数で入植した移住民の他に、個人で島内各地に移り住んだ人たちも多くいたということです。明治の終わりから大正にかけて、さまざまな工事や事業に従事するため来島した職人・技術者が、そのまま島に残ったという事例もあります。また、商人も多数移住してきており、現在まで続く商店のルーツが島外からの移住にあるという例も少なくありません。

個人で移り住んだ人たちに関しては、詳しい記録がほとんど残っていませんが、島内の郷土芸能を見てみると、「安納棒踊」は姫良郡加治木町の大工、「古田獅子舞」は大分からのシイタケ栽培農家など、個人で移住してきた人が伝えたものが数多くあります。このように、種子島にやってきた人々が、新しい文化をもたらしたという点も見過ごすことができない事実です。

移住の過程において、地元民と移住民との間の衝突が全くなかったとは言えませんが、寛容で親切心に溢れる島民の気質と、それに応える移住民の努力によって、両者の関係は概ね良好に保たれてきました。馘島移住における「親分―子分」の間柄や移住者と地元民との縁組などによって両者は繋がりを深め、現在4代、5代となった移住民は、島民として種子島の一翼を担う存在になっています。

本誌では、明治・大正期の移住を中心に紹介してきましたが、種子島には明治以前から現在に至るまで、さまざまな事情や思いを抱えて移り住む人が絶えませんでした。島の歴史は、地元民と移住民とが互いに影響しあって作られてきたともいえます。

写真2　生姜山を紹介した冊子

最後に、現在、種子島に移住し意欲的な活動を行っている人々の事例を簡単に紹介します。

地域おこし協力隊

地域おこし協力隊とは、過疎化・高齢化に悩む地方自治体が都市住民を受け入れて委嘱し、隊員の地域への定着と地域の充実・強化を目指す取り組みです。西之表市でも2010年より地域おこし協力隊員を採用し、現在も隊員が各地域に分かれてさまざまな活動を行っています。

歴代の協力隊員の活動としては、生姜山でかつて盛んに作られていた生姜の復興を軸とした地域振興（写真2）や、専門技術をもった隊員による特産品のパッケージや市内交通車両等のデザイン（写真3）

写真3　市内巡回バス「わかさ姫」

写真4　安城海岸でのサーフィンの様子

などの事例があげられます。協力隊員は、島外出身者ならではの視点で島の魅力を再発見し、地域の活性化につなげています。

サーファーの移住

美しい海に囲まれた種子島は、その地形からよい波に恵まれ、サーファーにとって憧れの地ともなっています。そんな種子島には、以前からサーフィンを目的に移住してくる人たちがいました。サーファーの中には、サーフィンをスポーツとして楽しむだけでなく、自身の価値観に根ざしたライフスタイルの一部として大切にしている人も多く、都会では実現しにくい暮らしを求めて移住してくる人も少なくありません。

かつては地元の人たちから敬遠されることもありましたが、近年、移住と言うと「サーフィンですか？」と尋ねられるほど、サーファーの移住が増え、地域活動の担い手として期待されるなど、快

写真5　西之表市サーフィン連盟による海岸清掃

写真6　伊関木折坂からの風景

く受け入れてくれる地元の人も増えてきました。

西之表市サーフィン連盟は、きれいな海を守るために定期的な海岸清掃（写真5）を行ったり、小学生の遠泳大会のサポートをしたりといった貢献活動も積極的に行っています。種子島で行われたプロサーフィンツアーや、サーフィンをテーマにした映画の撮影なども注目を集めました。

伊関の農泊プロジェクト

伊関地区に移住してきた人々を中心として、持続可能な循環型の暮らしと環境づくりに基づく「農泊プロジェクト」が始まっています。「農泊」とは、農山漁村において農作業などの生活体験と農村地域の人々との交流を楽しみ、その地の魅力を味わってもらう体験型観光のことです。プロジェクトメンバーは、有機栽培や自伐林業、黒糖作りなどについて学びながら魅力ある地域づくりを進めています。メンバーのほとんどは移住者ですが、地域の人たちと一緒に活動を盛り上げたいと語ります。

自然環境の保全と食の安心・安全を願い、また、島内外の豊かな交流と過疎化が進む伊関の地域活性化を願って奮闘中です。

4 移住記念碑

希望の島・種子島

現在の移住者の多くは、飢饉や噴火により、生きていくために切羽詰まった思いで移住し、必死の思いで生活の基盤を築いてきた人々とは様相を異にします。

しかし、種子島の豊かな自然と、寛容で温かな島民性に魅かれ、島での暮らしに希望をもって移住の地を種子島に求めた点では共通するものがあるのではないでしょうか。

種子島の懐の深さが、移住者たちを引き寄せているといってもよいのかもしれません。この種子島の魅力が大切に守られ、地元民と移住者が手を携えてこれからの種子島をより魅力溢れる島にしていけたらと願ってやみません。

西之表市内の移住記念碑

種子島には、移住百周年などを機に建立された記念碑が多く残されています。記念碑には、移住に至った経緯や当初の苦労、移住者の氏名などが綴られていることが多く、当時を知る貴重な資料となっています。

しかし、長年風雨にさらされて文字が判読しにくくなっている碑もあり、今後さらに風化が進むことが懸念されます。

ここに、西之表市内に点在する移住記念碑を集成して碑文などを記録するとともに、地図を掲載しますので、記念碑を巡る際のガイドブックとしても活用していただければ幸いです。

移住記念碑一覧

1	坊津・泊移住百周年記念碑	久保田 / 国上
2	筧家静岡移住百周年記念碑	太田 / 国上
3	沖永良部移住記念碑	白石 / 国上
4	甑島移住記念碑	野木平 / 国上
5	沖永良部島縁故者移住百周年記念碑	桜園 / 国上
6	桜島移住百周年記念碑	桜園 / 国上
7	甑島移住碑	柳原 / 伊関
8	甑島移住記念碑	川氏 / 現和
9	山川移住頌徳碑	岳之田 / 榕城
10	甑島移住紀念碑	鞍勇 / 下西
11	桜島移住記念碑	平松 / 古田
12	甑島移住百周年記念碑	上之町 / 古田
13	静岡移住記念碑	番屋峯 / 古田
14	奄美大島及び島内からの移住記念碑	十三番 / 古田
15	全国各地からの移住記念碑	二本松 / 古田
16	甑島移住記念碑	平山 / 安城
17	甑島移住記念碑	大野 / 安城
18	甑島移住記念碑	御牧 / 立山
19	全国各地からの移住記念碑	万波 / 中割
20	桜島移住記念碑	十六番 / 中割

1
坊津・泊移住百周年記念碑

久保田 / 国上

所在地

西之表市国上久保田公民館敷地内

碑　文

明治十六年よりあいつぐ台風は薩摩半島を直撃し、農漁民共に言語に絶する困窮に陥り明治十九年、十九戸が桑梓の地を離れ永住を求めこの地に移住し幾多の困難を克服し、荒畠を墾き薄を起し生活基盤の確立に切磋琢磨し漸時安定の緒につき遂に今日の安常楽土・久保田が形成され其代の民たるを謳歌するに至る。幾多の艱難辛苦に耐えひたすら愛郷の志に燃え、今日を将来せし先祖に対し深く敬意と感謝の念を表す。我等この地に生育せる住民は移住百年を興起躍進の契機とし愈々団結協力融和の決意を新たに郷土の大いなる発展を誓うと共に永遠に隆盛無窮たらんことを記念す。往時を追憶し、まことに感慨無量なるを覚えその真情を愛び総力を結集し移住百年の記念碑を建立し、本を尋ね末を恪しみ報恩反正の志を明かにし千載に伝えるものなり。

昭和六十一年十月吉日　地区民一同

2
筧家静岡移住百周年記念碑

太田 / 国上

所在地

西之表市国上寺之門太田　ヘゴ林入口

静岡県中内田村
筧家移住百周年記念碑
平成二十四年一月八日建立

3
沖永良部移住記念碑

白石 / 国上

所在地

西之表市国上白石公民館敷地内

碑　文

「吾がルーツを求める」ことは多くの人々の願いであろう　明治三十二年（一八九九年）頃大島郡和泊村国頭の鼻木喜之助　兼及び山西富沢・鶴等の家族が北種子村国上の古田に住みつき移住が成就した。大正十五年（一九二六年）七月国有地の払下げを得て現住地白石に逐次移動・十四戸で集落を造り専ら農を生業とした。この間人々の協力奮励によって生活は年々安定したが、昭和二十年（一九四五年）の敗戦によって世情一変青壮年の出征が相つぎ概ね百周年の今日現住世帯二十二戸となる。私達は世の変動に惑わされることなく子女の教育につとめ互に助け合って社会に尽し相葉の志に応え後世子孫が平和な国家社会の中で誇りと自信をもって生きられることを願い島外縁故者の協力を得てここに百周年記念の碑を建てました。

平成八年（一九九六年）十一月吉日

当初移住者の氏名と当時の年齢

鼻木喜之助	六十三才	深見良行 三十六才
〃　兼	四十五才	森　本実 四十四才
山西富沢	四十五才	深見西澤 六十一才
〃　鶴	四十六才	

白石開設時世帯主氏名と当時の年齢

新里中実	五十一才	鼻木藤之助 四十三才
深見富茂	三十三才	大栄典秀 四十四才
〃　西秋	二十五才	田畑西徳 四十六才
〃　西秀	二十八才	深見吉治 四十五才
市来裕厚	二十八才	白石白信 四十六才
森　元澄	四十六才	白石力子 三十五才
深見富西	四十五才	佐々木千代 四十八才
田畑眞名治	四十八才	尚　カメ 三十三才
竿田富実	五十一才	田畑俊秀 二十四才
田中竿明	四十三才	川畑村宣志 五十五才
鼻木喜平次	三十七才	池田須湧 四十七才

4
甑島移住記念碑

野木平 / 国上

所在地

西之表市国上野木平公民館敷地内

時維明治拾六年ヨリ続テ二年ノ台風ハ近古未未曾有ノ惨事ニシテ見渡限リハ飢餓ノ広ク殊ニ甑島ノ窮乏ハ訴フルモノ多キ上ル真ニ痛嘆ニ堪ヘザルナリ。若シ等閑視スレバ飢饉ニ乗ジニ悪疫ヲ以テシ悲惨ノ状況目々地獄大セントス急速救済ノ方ヲ講セズハト泉ヲ決シノ県知事渡辺千秋氏二願と拾九年四月鹿子島ニ移住スルコト当時事務所長牧野篤好氏鹿島戸長橋口武志北種子戸長上妻謙三氏国上世話係浜谷千郎氏ノ配慮ニヨリ居ラシムル二至ル

昭和五年四月建立

西岸寺住職　釈龍華　記

建立者　委員以下四名

明治拾九年移

曽木平左衛門	江口仙次郎	岩下喜左衛門
日笠山作太郎	江口仙市	鶴見伝四郎
戸川平吉	山下愛助	福元寛次
戸川次郎助	江口稔森	島中市左衛門
毛井精助	曽木　平	横浜慎春
戸川利吉	河内伝次郎	下江季次郎
竹之内長四郎	原崎庄之進	江口庄之助
原崎仲太郎	日笠山芳一	戸川長一
同武拾年	小田住八	福元三太
江口庄太郎	河内高八	江口高吉
山下万長衛	江口喜平	松元豊吉
江口孫八	戸川忠助	右移民組頭
福元軍太衛	戸川平太郎	右移民対指導者
井ノ上長平	戸川仁八	安納謙田石材彫刻

5
沖永良部島縁故者移住百周年記念碑

桜園 / 国上

所在地

西之表市国上桜園　久留真嶽神社境内

碑　文

明治二十八年（一八九五）大島郡和泊村国頭曲木カネ女史が、縁あって国上上之古田に移住し、以来縁故者等が次々と来島した。大正三年の桜島大爆発によって移住した桜島出身者に配分された土地の中に適地が出たのを契機に上之古田地区から大正十一年頃移り住んだのが桜園定住の始りである。以来両島出身者が、仲良く手を取り合い互いに研鑽努力を重ねて、今日の発展を見るに至った。種子島移住百周年を記念し、御世話になった地元国上校区民への感謝と先人諸霊諸氏に対し敬意を表し今後の精進を誓ってこの碑を建てる。

平成八年（一九九六）十一月吉日

桜園移住者及縁故者一同

6
桜島移住百周年記念碑

桜園 / 国上

所在地

西之表市国上桜園公民館敷地内

碑　文

私達の桜園部落は、大正三年の桜島の大爆発により罹災した桜島罹災民八六世帯五一九人が、大正三年四月十三日当地に入植し、桜島のような農業の立国にと「桜園」と命名して誕生しました。その後、大正末期頃になると沖永良部島からの移住民なども入植、以来、先人達は幾多の困難苦難を乗り越え、お互い協力し合いながら、部落発展のため尽力されました。桜園の歴史は、先人達のこうした「汗と涙の結晶」なのです。

私達は、先人達がそれこそ必死に守り築いてきた苦労に感謝し、その御遺徳に報いる為、さらには未来の子供達へ繋げるため、創立百周年を記念して「部落創立百周年記念碑」を建立するものです。

今回の「百周年記念事業」は在住者及出郷者の方々の多大な御支援御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

私達は「美しいふる里」「住みよいふる里」をめざし、今後とも部落民一致団結して頑張ることを、ここに決意します。

平成二十六年四月十三日

7
甑島移住碑

柳原 / 伊関

所在地

西之表市伊関柳原公民館敷地内

明治拾六年ヨリ參拾年二亘リ襲来セル台風ハ近世稀ニシテ其間西瓜ル広ク
甑島其ノ災害ヲ蒙ルコト最モ大ナリ田畑ノ流失家屋ノ倒壊相次ギ衣食ノ
窮乏ニ加フルニ悪疫流行二其ノ惨状言語ニ絶ス於茲当時ノ鹿児島県知事渡
辺千秋氏ニ懇願シ同十九年四月住民相連レテ種子島ニ移住スルコトトナレ
リ当時熊毛郡事務所長牧野篤好氏甑島戸長橋口武志氏北種子戸長上妻謙
三氏伊関出張所係池亀新六氏ノ尽力ニ依リ此ノ地ニ居ヲ携フルニ至レル モノ
戸数拾九ヶ軒米五十武年幾多ノ困苦ト戦ヒツツ荒蕪ヲ開拓シテ遂ニ今日
ノ繁栄郷柳原部落四十八戸ヲ形成スルニ至ル往時ヲ追憶シテ感慨更ニ新タ
ナルモノアリ已ニ部落民ノ中ニハ本年三月祖先ノ地甑島ヲ訪問シテ聖霊祭
ヲ行フアリ今又図リテ移住記念碑ヲ建設シ之ヲ後世ニ伝ヘントス

昭和十二年九月　熊毛支庁長　江口義照書

明治十九年移住
向　半助
中野平太郎
南　吉助
西　伝平
西　源平
下江市太郎
中野太平
中川太三次
柳川孫七
地蔵吉太郎
中野太郎
中川太三次
柳川休七
移住指導者
中野静四郎
中野静次郎
永田十吉
田畑庄之助
中野伝次郎
中野甚助
中野常太郎
田畑清太郎
曽木ヤエ
町頭
南　吉助
柳川休七
向　半助
後年移住
広庭猪之助
福元市助
前野嘉二太
出口幸之助
移住者
中道伴七
江口　岩雄
江口善十郎
松田助太郎
種子田小次郎
長濱善左衛門
松田金十郎
相良紋兵衛
相良長次郎
竹中儀七
中野喜八
江口善次左衛門
橋野浅次
畑山博五郎
畑山善市
迫田八太郎
小畑末吉
梅木傳八
櫻元友松
二副三太郎
嫌氷　廣
川添水也

8
甑島移住記念碑

川氏 / 現和

所在地

西之表市現和川氏公民館敷地内

碑念記住移

故郷甑島累年凶作ノ災害ヲ
蒙リ県救済ノ下二明治十九
年四月十一日薩摩郡下甑島
村手打ヲ発シ同月十三日種
子島ヘ到着シ此地ニ移リテ
以テ永住ノ地トヌ之此地素
拓困難ナリシガ上　皇恩ノ
渥キニ浴シ下現和民民ノ同
情ニ沾ヒ発憤激励以テ今日
ノ盛ヲ致スヽ顧ミレバ墳墓ノ
地ヲ棄テテヨリ二十有九年
郷黨親戚シ戸々故郷ノ楽ヲ
享クルモノ夫レ感慨陽ヅ子
孫後昆長久其徳ヲ欽仰シ以
テ家ヲ興シ世ヲ益センコト
ヲ期セヨヨ

大正三年三月十日謹建　寄留者

10
甑島移住紀念碑

鞍勇 / 下西

所在地
西之表市下西鞍勇公民館敷地内

表

（和訳文）
明治十七年の夏、初めて甑島よりこの地に移る。戸数わずかに七、炊煙希少、艱苦相次ぐ、しかして貧に堪ふること数年、もっぱら農業を努め、かたはら薪炭を市に販り、勉(つとめ)習として、怠らず、つひに生計を全う す。日清日露の役に、軍人中野周右衛門等を出だし、ようやく世人に伍するを得たり。さいはいに、たまたま地を替へて移居する者あり。今、戸数十有八に及ぶ。おのおの畑田枚数十町を有す。他日有望の地たること期すべし。

裏

牧瀬彦左衛門　西　庄之助　橋本三三次
中村太三次　山内半兵衛　山内寛太郎
森　精吉　山越力松（熊本県）
中村太七　山口村吉（熊本県）
地蔵勇吉　小野原幸之助（鹿児島県）
中村六助　宮里庄市（鹿児島県）
横道七次郎（香川県）　牧瀬清次
三毛半八（大分県）　牧瀬良助（東町）
三枝健佑（大分県）

明治廿二年十月十五日謹建之
明治四十年十一月　改修

9
山川移住頌徳碑

岳之田 / 榕城

所在地
西之表市榕城岳之田墓地公園入口

明治十七年わが田郷山川港大いに飢う。わがともがら、いきほひ活くるを保つ得さるに至る。河内寛右衛門君は種子島の人なり。たまたま山川港に来たり。その悲酸の情状を為て、心大いにあわれみ、先づ松木甚助、南幸助に諭す。
両名大いに喜び此の地に移住す。地は厳田と称し、即ち君が所有たり。両名居ること期年にして頗る其の所を得るにいたれり。ここに於いて、来住する者相継いで六家に至る。初め此の地、住民なし。わがともがらの来住するに及び、居然として、村落をなす。ここに於て春耕秋収、衣足ようやく足り、又さきの所謂飢饉災色の厄を知らず。しかして、十九年一月、君没す。わがともがら追慕に堪えず、この石を建て以て之を祭る。かさねて、戒めて曰く。わがともがら、仰いでは親を養い、俯しては子を育する。これが恵みぞや。鼓腹壌、以て泰平の雨露を愉しむ。これ誰ぞ恩ぞや。一として夫子恩恵のたまものに非る無きを今日よりして乃ち後世子孫に至るまで、敬虔の誠を致し、祭奠の儀を修し、欽仰して、怠ることなく、稔豊かなればここに告げ、歳凶なるもここに祝げむ。夫子の賞、豈、渺然として、吾が子孫を損つるあらんや。即ち石に彫りて追遠の意を致し、併せて後昆に示す

明治廿二年十月十五日謹建之
明治四十年十一月　改修

11
桜島移住記念碑

平松 / 古田

所在地

西之表市古田平松公民館敷地内

噴　火

大正三年五月八日建立

移住記念碑

組長　横山虎雄謹書

12
甑島移住百周年記念碑

上之町 / 古田

所在地

西之表市古田上之町公園地内

（部落創設記念碑文）

此地昔は深山と茅野にて猪鹿等の棲みし所なり。偶々明治十七年、甑島に於ける台風の被害は遂に大飢饉となり、島民は県甑島移住事務所の斡旋に依り、明治十九年四月、下甑島出身の十戸、当地に移住開拓の第一歩を印せしなり。当時の古田村戸長榎本新吉を始め、区民各位の親身も及ばぬ歓迎と助力を受け、慣れぬ異郷の地に幾多の艱難辛苦と奮闘努力の結果、遂に今日の上之町部落の基礎を築きしなり。爾来六十有余年、今や戸数三十二、地味豊かに安住するに至れるは、是れ全く開拓者の賜物なり。茲に部落民一同、碑を建て、芳名を刻して、その偉業を讃え、永く子孫と共に感謝報恩の標示と為さんとす。

上山彦左衛門
上山長太郎
江口嘉七郎
小川庄市
橋口喜三次
橋口隼一
橋口仁平衛
山内甚助
吉永宇一郎
松田えだ

部落民一同建之

撰文並書　佐藤敬順
刻　花木富哉

昭和二十八年三月十五日

13
静岡移住記念碑

番屋峯 / 古田

所在地

西之表市古田番屋峯公民館敷地内

松下助七　明治四十二年　静岡県城東郡河東村字前岡二十七番地
松下清作　明治四十二年　静岡県小笠郡南山村河東二百十五番地
栗田茂三郎　明治四十二年　静岡県小笠郡中村大石
澤柳茂三郎　明治四十三年　静岡県小笠郡千浜村千浜一番地
杉森伊八　明治四十四年　静岡県小笠郡南山村河東百三十一番地
松下國平　明治四十四年　静岡県小笠郡南山村河東九十六番地
下嶋今吉　大正三年　静岡県南山村高橋百十六番地
射場春太郎　明治三十九年増田移住　大正八年　当地へ移る
中村隆太郎　徳島県海部郡中木頭村　大正八年　静岡県小笠郡南桜村上妻木坂下

14
奄美大島及び島内からの移住記念碑

十三番 / 古田

所在地

西之表市古田十三番公民館敷地内

表

移住記念

明治三十六年移住
是枝藤三氏田上義雄氏
此地ニ居住シ部落ヲ開
拓シタル者也

裏

昭和十年十一月
組長山口岩吉
寄贈

16
甑島移住記念碑

平山 / 安城

所在地

西之表市安城平山公民館敷地内

明治十九年四月二十六日及同二十年三月三日ノ二回二渉リ此地ニ移住ス戸数合セテ二十九戸ナリ当時ノ熊毛郡長牧野篤好氏及安城区長榎本仲兵衛氏区長代理鮫島喜十次氏等指導啓発ニ力メラルラズ茲ニ碑ヲ建テ其ノ徳ヲ不朽ニ伝ヘ併テ移住ノ記念トナスモノナリ　于時大正十二年四月

第一回　森清左衛門　榎本勘次
小倉良助　原崎彦次郎　石橋雑七
宮園喜八　竹之内惣右衛門　丸田辰五郎
大重休次郎　原崎善之丞　江藤虎吉
川畑新次郎　山本仲助　地蔵佐多
今井早助　脇田平助　川口盛一　彫
延時庄兵衛　榎本源八
榎本三次郎　宮園末治
第二回　宮園治市
竹之内源十郎　上野三助
江口善之進　小倉広助
竹之内太三次　浜口仁次郎
永山喜藤次　中村半次

15
全国各地からの移住記念碑

二本松 / 古田

所在地

西之表市古田二本松公民館敷地内

大正三年桜島より　山下市太郎　村有吉　和田政彦
トカメ　スミ　ヨシ　アサ　山口善政
岩崎萬吉　宮里正市　植村春政
カツ　長義　中園儀一
ケサマツ　純義　光義　中間善漁
萬左衛門　明治四十年出水より
萬助　客野　黒崎矢助
岡村市助　キクエ　ツヤ
ケサヅル　大正十五年宮崎より　万兵衛
正俊　串間盛実　万太郎
タケ　サワ　窟田亀之助
伊助　一二三　ワサ
盛吉　大正十年大島より
原田十吉　衛　栄元　盛夫
日高潤二　貢　早苗
松元庄市　川村佐善千代　トク　堀内正次郎
庄助　明治三十五年甑島より　明治四十年四国より
テヨカメ　畑山善助　村川当助
三蔵　ユキ　時次
庄栄　清五郎　昭和四年年伊作より
村山有作　善七　平吉　遠藤秀夫
タカ　和田政之進
常次　セン

17

甑島移住記念碑

大野 / 安城

所在地

西之表市安城大野公民館敷地内

（裏）部落は以前より僅かの人々により農耕されていた。たまたま甑島が三ヶ年に及ぶ風水害の大災のためこの地に八世帯移住するに至った爾来八十有余年今や大部落として繁栄し、住民等しく平和に安んずるはこれ全く移住者遠の不撓不屈の開拓者精神のたまものである　時恰も明治百年を迎えるに当り記念碑を建立し以て永く故人の労苦をしのぶよすがとせんとする

明治十九年四月薩摩郡下甑島村手打出身
江口カメ　松田民之助　松田次郎助　森七郎
橋口キクヨ　吉永市兵衛　森精次
同年　植村新蔵　同郡中甑島村出身
大正十年　川辺郡勝目村出身
原田与治郎
昭和二年　揖宿郡柳田村出身
上敷領熊市

昭和四十三年秋
移住者子孫建立
撰分併書　佐藤敬順

18

甑島移住記念碑

御牧 / 立山

所在地

西之表市立山御牧公園地内

明治十九年　甑島より移住したる吾々の祖先は立山区を定住の地とし、御牧部落を建設した。未開の当部落を開拓し、永遠の平和郷としての基を定められた。
昭和二十七年七月、部落民挙って祖先の偉業を讃え、尚、永遠に連る繁栄を祈りつつ、西岸寺野田氏の土地提供を得て、ここに記念碑を建立する

19
全国各地からの移住記念碑

万波 / 中割

所在地

西之表市中割万波三文字

大正五年四月十三日

移住記念碑

木成山

学林地部落建設者

川俣

中条伝吉　以来五十戸増

桜島からが多い。以降、岡山、四国、奄美大島、宮崎からも移住。七十戸もあったが、今四十余戸《1965年》

（種子島碑文集Ⅱ）

20
桜島移住記念碑

十六番 / 中割

所在地

西之表市中割十六番県道沿い

大正三年三月十二日

移住記念碑

熊毛郡長中山春美

1. 坊津・泊移住百周年記念碑（久保田 / 国上）
2. 筧家静岡移住記念碑（太田 / 国上）
3. 沖永良部移住記念碑（白石 / 国上）
4. 甑島移住記念碑（野木平 / 国上）
5. 沖永良部島縁故者移住百周年記念碑（桜園 / 国上）
6. 桜島移住百周年記念碑（桜園 / 国上）
7. 甑島移住碑（柳原 / 伊関）
8. 甑島移住記念碑（川氏 / 現和）
9. 山川移住頌徳碑（岳之田 / 榕城）
10. 甑島移住紀念碑（鞍勇 / 下西）
11. 桜島移住記念碑（平松 / 古田）
12. 甑島移住百周年記念碑（上之町 / 古田）
13. 静岡移住記念碑（番屋峯 / 古田）
14. 奄美大島及び島内からの移住記念碑（十三番 / 古田）
15. 全国各地からの移住記念碑（二本松 / 古田）
16. 甑島移住記念碑（平山 / 安城）
17. 甑島移住記念碑（大野 / 安城）
18. 甑島移住記念碑（御牧 / 立山）
19. 全国各地からの移住記念碑（万波 / 中割）
20. 桜島移住記念碑（十六番 / 中割）

● … 記念碑がない移住集落

西之表市移住年表

治

6年	3月	砂糖自由販売令が出される
10年		西南戦争に敗れた谷山の田中金蔵が兄弟とともに坂井村新町（中種子）に逃れてくる
11年▼12年		全国の砂糖商人が奄美大島の五島に押し掛ける
13年		田中金蔵が一族を率いて定住、熊野浦を開き、漁港としての基礎を築く
15年▼16年		大島産砂糖の市場価格暴騰
17年		大暴風雨
	6月	台風、県下の倒壊戸数1万5千戸
	8月10日	台風、西之表港内にて豊瑞丸破船
	8月25日	山川から岳之田に2戸移住し、以後順次移住し、6戸となる
18年	2月	大雪
	6月	薩摩・伊佐地方集中豪雨、農作物被害甚大
	9月15日	米国船カシミア号暴風雨に遭い、種子島東海にて沈没
		乗組員8名立山に漂着
	9月20日	乗組員5名伊関に漂着

明

19年	3月	甑島からの自費渡航者53戸、種子島に到着
		坂井村（中種子）で甑島からの自費渡航者の中に天然痘発生、患者10人以上
	5月16日	国・県が費用を負担し、種子島移住計画実行される
		甑島からの第一次移住民、第一陣38戸、182人が赤尾木港到着
		翌日、各村に入植
	5月19日	甑島第二陣124戸、569人が船14隻で到着
		同日第三陣82戸、352人が船10隻で到着
		13戸55人が乗った1隻はシケで難航し、国上浦田に到着
	6月13日	立山村御牧の移住集落にて天然痘発生、患者20人を超える
	10月21日	台風、種子・屋久の被害甚大
		この台風により、奄美大島でも食料欠乏。野生のソテツの実を食して飢えをしのぐ
19年▼20年		坊津・泊から19戸が国上久保田に移住
	5月▼3月	甑島移住者の死亡者数49人、うち22人は天然痘
20年	2月19日	古田村の移住者住宅十軒長屋が全焼
		これにより第二次移住者の住宅は一戸建てとなる
	3月23日	甑島からの第二次移住民、各村に入植

明治

22年	5月26日 甑島移住民の歎願により浄土真宗大谷派鹿児島別院から僧侶が派遣され、移住集落を慰問
	渡辺千秋鹿児島県知事、種子島を視察
27年	4月25日 下中前之浜（南種子）に英国船ドラメルタン号漂着
28年	石井清吉が知人深川助九郎の悪講を受け、種子島に渡り入植地の調査を実施
28年頃	沖永良部から轟木喜之助・兼一家が国上上古田に移住
30年	石井清吉が徳之島から十数戸の家族を連れて、立山野木に移住
	熊毛・馭謨（ごむ）（屋久島・口永良部島）の両郡が合併して熊毛郡となる
	牧野鷲好（まきのわしよし）が初代熊毛郡長になる
	香川県から立山芦野に10戸移住
35年	浄土真宗大谷派、種子島常住の僧侶が赴任
35年以降	浄土真宗本願寺派村岡映智師が甑島から来島、西岸寺の住職となる
40年	全国各地から古田二本松に十数戸移住
42年	大分県人が椎茸栽培法を伝える
44年	静岡から古田番屋峯と野間池之平（中種子）に数戸移住
	静岡県から国上太田に寛家が移住

大正

3年	1月12日 桜島爆発
	1月17日 鹿児島県から熊毛郡長に急電あり「桜島罹災民移住に関し協議の件あり郡長・三村長至急出頭されたし」
	1月28日 大阪商人・森林吉五郎が妻と共に西之表に移住
	3月13日 桜島罹災民の種子島移住計画実行される
	以降、10回にわたり、桜島から中割十六番、古田平松、国上桜園などに336戸、2193人移住
	5月27日 桜島爆発の罹災児童を古田校に収容する
	11月 鴻峰小学校設立
	沖永良部から上古田に入植した人々が立ち退きを迫られ、15戸は桜園に移り住む
13年	西之表市街地、大火で大部分を消失、森林吉五郎、大阪に帰る
14年	1月5日 沖縄県糸満から好漁場を求めて北上、大塩屋（中種子）に8戸が定住
15年	上古田に残っていた沖永良部からの移住民25戸が白石に移り住む

昭和

2年	甑島からの移住民代表80名、移住50年を機に祖先の地甑島を訪問
12年	3月8日 野木平に信楽寺建立
55年	

おことわり

本誌では，石碑や記録などが存在する移住地域を中心に取り上げました。この他にも，関西・高知・大分・鹿児島・奄美大島・喜界島・与論島・沖縄などから，縁故を頼って移住した人や単身で商売のために移住した人，大工・石工・山師（やまし）など技術者として移住した人など，さまざまな移住の形があります。しかし，本誌の編集においては，明治期の移住に絞ったことや資料の不足などにより割愛せざるをえない事例もありました。

今日の礎（いしずえ）をつくった先人の辛苦の足跡を歴史に留めることは，今に生きる人々の責務であり，今回，網羅（もうら）できなかった部分については，今後の課題と考えておりますので，どうぞご了承ください。

編集スタッフ一同

ご協力いただいた方（敬称略）※行政連絡員

伊関校区　古田新一（区長），田畑光秀（柳原※），前野良一（柳原），南　重徳（柳原）
中野一子（柳原），中野邦見（朝日が丘），長野広美，中澤貴美子

国上校区　長倉義秋（区長），南　文次郎（桜園※），高石文蔵（白石※），福元謙二（野木平※）
春山和敏（奥※），宮下富士夫（久保田※）
石川君男（上古田※），長野　勝（寺之門），横山隆二（寺之門），筧　良平（寺之門）
筧ひろ子（鹿児島市），筧　仲平（大阪府），沖吉富寛（松島）

古田校区　窪田良二（区長），大里千代子（十三番※），山下かおり（二本松※）
馬場真二（村之町※），松田弘人（中之町※），山之内一信（上之町※）
松下栄市（番屋峯※），横川三好（平松※），横口喜佐夫（上之町）
江口重加（上之町）

中割校区　奈尾正友（区長），大木田俊和（地域おこし協力隊）
横山武志（千段峯※），田仲レイ子（生姜山※），松岡　希（十六番※）
村山千代子（万波※），森園政俊（地域活性化交流拠点施設「こうのみね館」管理人）
大山末廣（中野），森園文雄（元中割区長），川村洋子（岳之田）

立山校区　青山洋信（芦野※），宮野幸二（御牧※），鮫嶋新吉（立山※）
宮田和己（野木※），馬場たづ子（植松※），小倉良光（立山）
武田宗吉（立山），梶原ノブ子（御牧），竹内エミ子（川迎），青山ヒサ子（芦野）
青山エミ子（芦野），上妻伸子（上之原町），柳田さゆり（鴨女町）

安城校区　古田嗣男（区長），丸田光徳（平山※），入鹿山君徳（平園※）
山口三雄（大野※）

住吉校区　押川優幸（区長），遠藤芳和（形之山※）

現和校区　西田義和（区長），迫田信男（川氏※）

下西校区　野平道実（区長），中野鉄二（鞍勇※）

榕城校区　小倉隆久（区長），川口勇二（竹鶴※），森　友康（今年川※）
江口洋文（桃園※），今村義行（岳之田※），坂元道明（平田※）
清水浩幸（本立※），能勢勘司（本立），野元義孝（桃園），日笠山　望（本立）
外園哲郎（上之原町），山内文雄（東京都・鞍勇），串間静夫（上之原町）

その他　種子島茶生産組合
サイト「ふるさと種子島」
サーフショップ　オリジン
鮫島あかね

参考文献

著者・資料名	発行年	編集・発行元
下野敏見・鮫島宗美『石の文化史　種子島碑文集』第1・2集	1965年	熊毛文学会
「安城・立山の民俗と歴史」『種子島研究』第4号	1965年	種子島高等学校郷土研究部
「古田・中割地区の民俗と歴史」『種子島研究』第7号	1965年	種子島高等学校郷土研究部
「島間・野間・国上の民俗と歴史」『種子島研究』第9号	1967年	種子島高等学校郷土研究部
「西之表の民俗と歴史（桃園・石堂）」『種子島研究』第12号	1971年	種子島高等学校郷土研究部
「国上・伊関・馬毛島の民俗と歴史」『種子島研究』第13号	1971年	種子島高等学校郷土研究部
『西之表百年史』	1971年	西之表市史編纂委員会編
『中種子町郷土誌』	1971年	中種子町郷土誌編集委員会編
『西之表市商工会名鑑』	1977年	西之表市商工会
「西之表市の桜島・沖永良部島・坊津町移住部落」『種子島研究』第20号	1982年	種子島高等学校郷土研究部
『国上郷土誌』	1986年	国上小学校PTA
『飯島から種子島移住　野木之平百年』	1986年	野木之平移住百周年記念実行委員会出版部
『移住百周年記念誌　柳原』	1986年	移住百周年記念事業実行委員会出版部
『南種子町郷土誌』	1987年	南種子町郷土誌編纂委員会編
『人生史　種子の国に生きる』資料編	1988年	興文堂
『上之町　百年のあゆみ』	1989年	古田上之町移住百周年記念実行委員会
『二十番郷土誌』	1991年	中種子町立歴史民俗資料館
『桜園・白石部落　沖永良部移住百周年記念誌』	1997年	移住百周年実行委員会
井元正流『種子島人列伝』	2003年	南方新社
『与論島移住史　ユンヌの砂』	2005年	南日本新聞社
『番屋峯　百年のあゆみ』	2010年	古田番屋峯移住百周年記念事業実行委員会編
『筧家移住 100 周年記念誌』	2012年	筧家移住 100 周年記念行事実行委員会
星野元興「過疎地域における寺院経営」『地域政策科学研究』11 p101-119	2013年	鹿児島大学
『中割史の記録（100 周年記念事業）』	2016年	桜島移住中割史 100 周年記念事業実行委員会
『月讀神社のあゆみ』	2017年	月讀神社改修実行委員会
松下助七『松下助七家沿革誌』	—	（未発表資料）

明治維新150周年記念・西之表市市制施行60周年記念

明治期の種子島移住史

明治期に種子島へ移住した人々の歴史と文化

監　修	鮫嶋　安豊（種子島開発総合センター参与）
執筆・編集・調査	鮫島　斉（西之表市教育委員会社会教育課）
	荒木　眞紀子
	中園　愛
資料調査	上妻　文乃
本文・装丁デザイン	齋藤　真理子

2018年12月　初版第1刷発行
2019年　4月　第2刷発行

発　行　西之表市教育委員会
種子島開発総合センター「鉄砲館」
〒891-3101
鹿児島県西之表市西之表7585
TEL　0997-23-3215
FAX　0997-23-3250

印刷・製本　株式会社　種子島新生社印刷

かごしま
明治維新博
150th Anniversary

ふるさとの津を離れて
戦争と人々の記録

明治期の種子島移住史

明治期に種子島へ移住した人々の歴史と文化

西之表

西之表市教育委員会